

漁況海況予報事業

村山達朗・安達二郎・田中伸和・北沢博夫

目 的

沿岸沖合漁業に関する漁況と海況とを調査研究し、その結果にもとづいて作製された速報ならびに予報を正確迅速に広報普及し、漁業経営の安定に寄与することを目的とする。

調査の実施概要

1. 海洋観測の種類と実施月（付表に海洋観測記録及び卵稚仔査定結果を示す）

観測年月日	調査名	観測点	調査員
60. 4. 2 ~ 4	沿岸定線調査	33*	北沢 博夫
60. 4. 30 ~ 5. 2	沿岸定線調査	35**	田中 伸和
60. 8. 5 ~ 8	沖合定線調査	20	北沢 博夫
60. 9. 3 ~ 6	漁場一斉調査	27	田中 伸和
60. 10. 2 ~ 4	沿岸定線調査	20	田中 伸和
60. 11. 5 ~ 8	沿岸定線調査	15	村山 達朗
61. 3. 4 ~ 7	沿岸定線調査	33***	村山 達朗

*補間点14点を含む。 **補間点15点を含む。 ***補間点16点を含む。

水温・塩分検定：村山 卵稚仔同定：北沢 生物調査：安達・田中

2. 観測定線 図1に示す。

3. 調査項目

観測層 0、10、20、30、50、75、100、150、200、300 m 深

観測項目 水温、塩分、卵稚仔、気象、海象、釣獲試験

4. 調査船・観測機器

調査船 島根丸（139.06トン、770馬力）

観測機器 ナンセン採水器・サリノメータ（オートラブ社）・防圧転倒温度計・DBT（環境計測システム）・測深機（油圧式3.7馬力 1500m）・魚群探知機（古野電気）

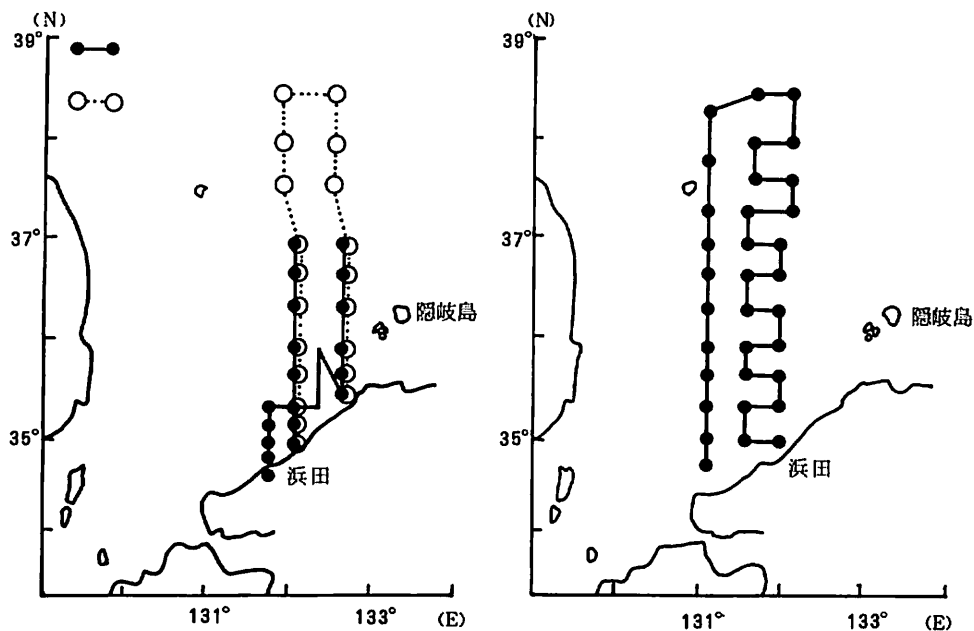


図1 観測定線

調査結果の概要

昭和60年4月から昭和61年3月までの浜田沖北方断面の水温分布および、平年差を図2～8に示した。各月の海況の概要は以下の通りである。

- 4月： 全般的に平年並の水温分布であるが、浜田沖70～90 mileの海域は高山沖の冷水の影響を受け、平年より低めである。この傾向は1984年の秋より続いており、高山沖の冷水が接岸傾向にあったことを示している。
- 5月： 沿岸域及び表層の水温は平年並みの上昇を示しているが、浜田沖50～70 mileの中層以深及び90 mile以上の沖合域では平年より低めとなっている。沖合底曳船からの聞き取り調査では高山沖でアマダイの斃死現象が報告されており、沖合域はかなり水温が低かったようである。
- 8月： 沿岸部の一部を除いて水温は全般に平年より高めであり、特に浜田沖70～90 mileの中層域では平年より6℃以上高めとなっている。
- 9月： 8月同様、沖合域を中心として平年より高めの海域が広がっている。
- 10月： 沿岸域の水温は平年並みとなったが、浜田沖80～100 mileの沖合中層域を中心として平年より高めの海域が広がっている。8月から続いている沖合域での高温傾向は島根沖冷水が例年になく西偏しているためである。
- 11月： 水温は前月までとは一転して低めの海域が広がっており、浜田沖70 mile付近の中層を中

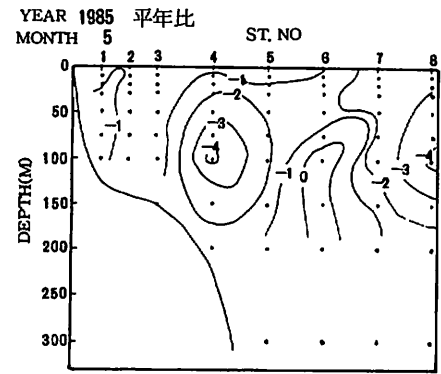
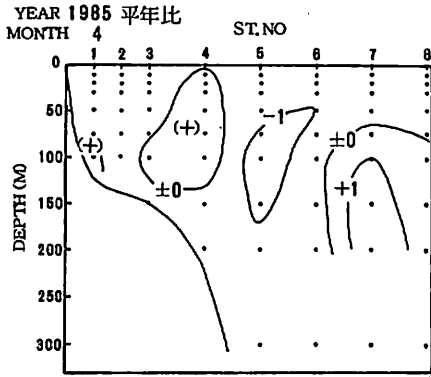
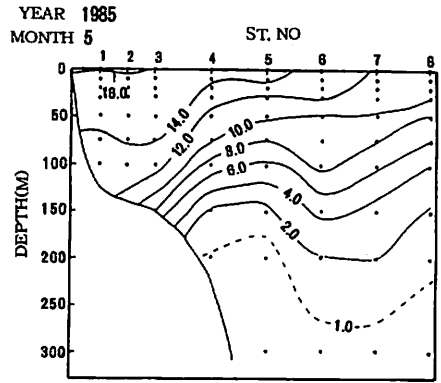
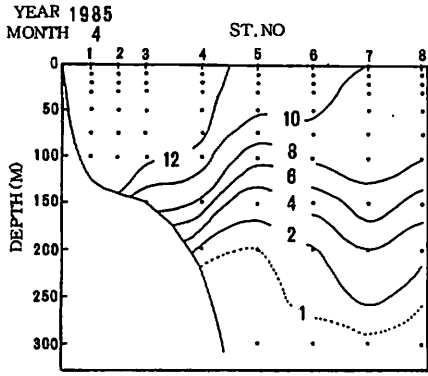


图 2

图 3

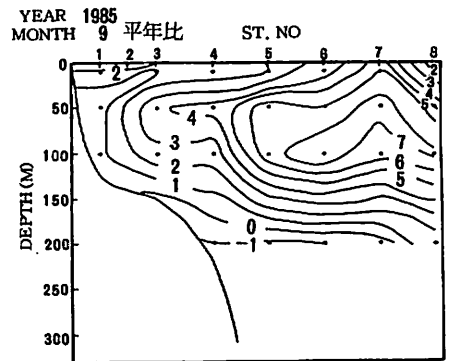
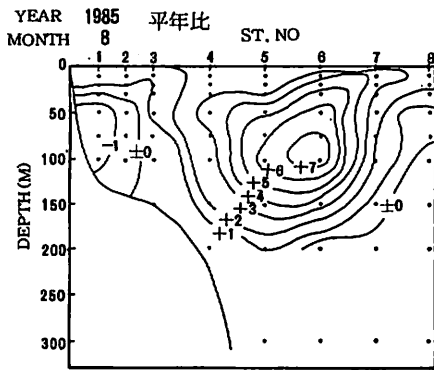
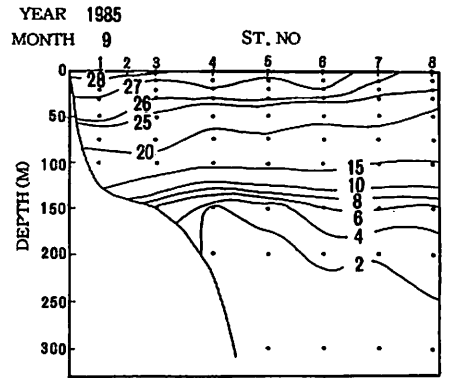
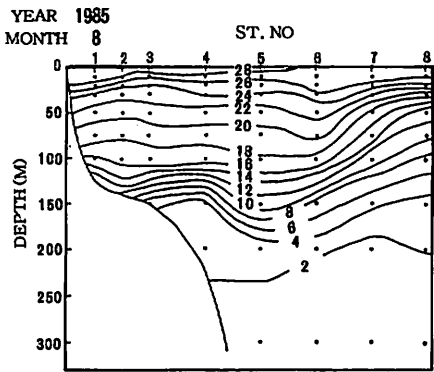


图 4

图 5

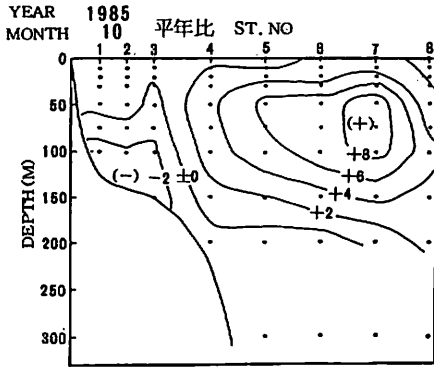
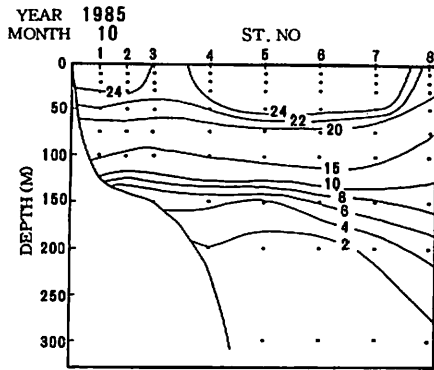


図 6

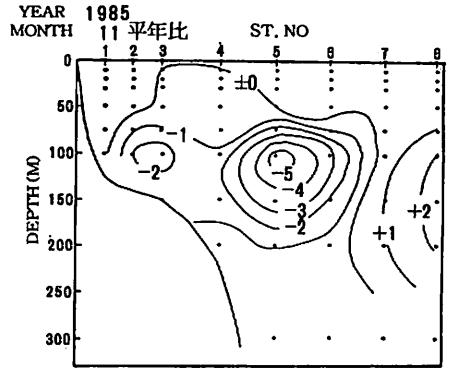
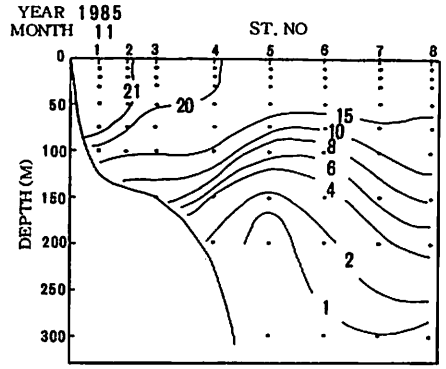


図 7

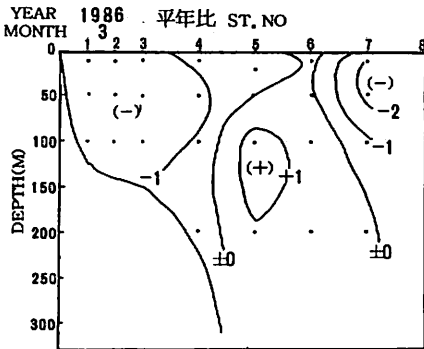
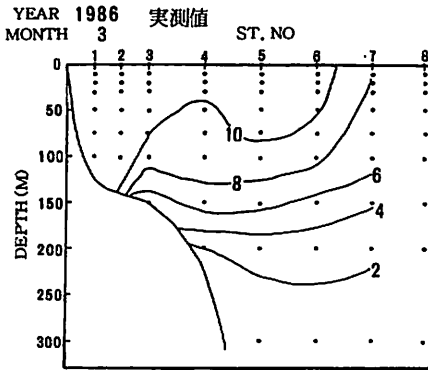


図 8

心として部分的には平年より 5°C 以上低めとなっている。これは夏以来続いていた島根沖冷水の西偏状態が終り、逆に島根沖に接岸したことを示している。

3月：年間を通じての最低水温期に入っているが全般に平年並みの海域が広がっている。浜田沖 100 mile の沖合域では 2°C 前後低めとなっている。

漁 況

1) 漁獲量の経年変化

図9に昭和40年以降の浜田港における巾着網漁獲量の経年変化を示す。

漁獲量の山は昭和45年と昭和51年に、谷は昭和47年と昭和53年にみられ、この山と谷は漁獲物の魚種交代の時期とほぼ一致している（後述）。全体の傾向として増加の傾向にあり、昭和57年以降は6万トン台の高い水準を維持し、昭和60年には過去最高の約73,000トンに達した。

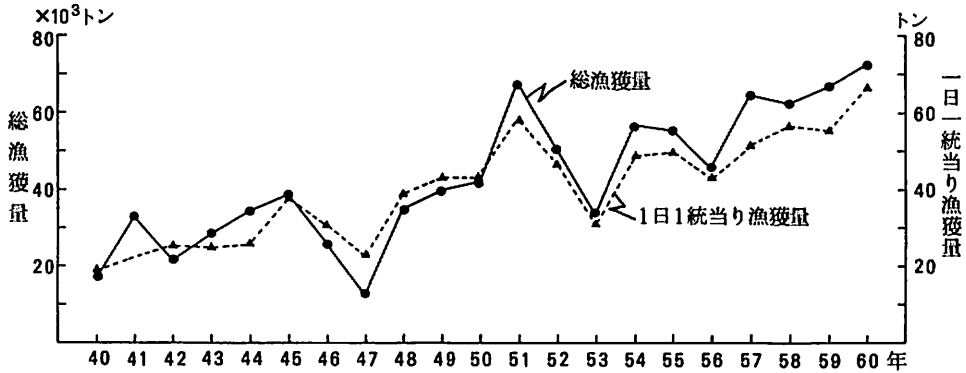


図9 浜田港における巾着網漁獲量の経年変化

2) 漁獲量の季節変化

図10に昭和58年～60年までの月別漁獲を示す。

近年の漁獲パターンは3～6月の春漁と、11～12月の秋漁とはほぼ分けることができたが、このパターンは崩れつつある。すなわち、1～3月期のマイワシの好漁（後述）による漁獲量増大で、2～3月を漁獲のピークとなる1峯型の漁獲パターンとなっている。昭和59年と60年にはこの1～3月期の漁獲量で年間漁獲量の約50%を占めており、記録的な漁獲量は同時期のマイワシの漁獲によるものである。

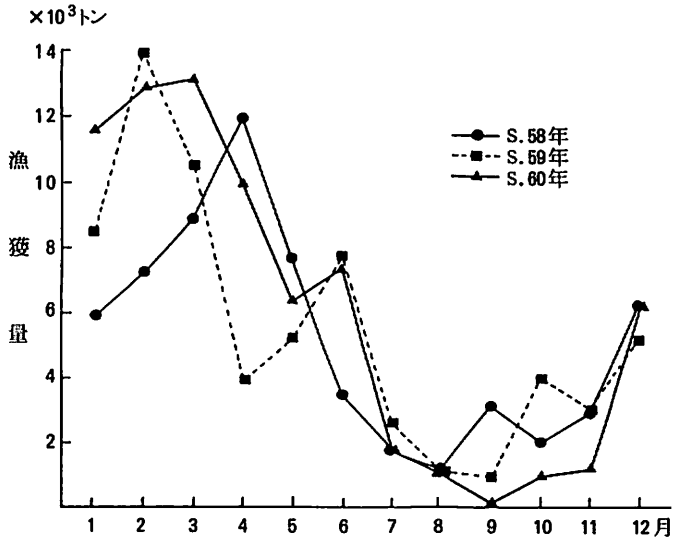


図10 昭和58年～60年の浜田港巾着網漁獲量の季節変化

3) 漁種構成の経年変化

図11に巾着網漁獲量の魚種構

成の経年変化を示す。

漁獲の主体は昭和45年頃まではマアジであり、昭和45年～51年頃まではマサバであったが、昭和52年頃から現在まではマイワシとなっている。この現象は各魚種の資源水準を反映していると考えられ、現在はマイワシの時代であることがわかる。

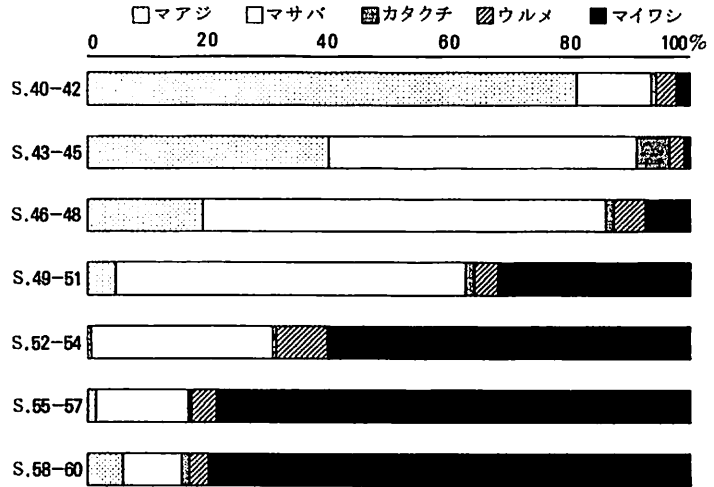


図11 浜田港における巾着網漁獲割合の年変化

4) 魚種別漁獲量の季節変化

図12～14に昭和58年～60年のマアジ、マサバ、マイワシ、ウルメイワシの漁獲量の季節変化を示す。

① マアジ

図12にマアジ漁獲量の季節変化を示す。

マアジはその豊漁期には3～5月と9～10月に好漁されることが多かった。しかし、近年では春漁期が遅れ、5月中旬に初漁がみられ、6月にピークとなり、以降7月末までに減少し、再び9～10月にピークとなるパターンとなっている。昭和58年～60年についてみれば、昭和58年と60年には6～7月に1才魚主体の漁獲が、昭和59年には9～11月に0才魚主体の漁獲がみられ、各年とも近年にない好漁を示した。こ

これは昭和57年生まれと昭和59年生まれの資源水準が高かったことを示唆するものである。また、マイワシなどと比較して漁獲規模は小さいものの、昭和55年以降漁獲量は徐々に増加傾向にあることなどからマアジ資源も復活の気配をみせているように思える。これらの現象を資源回復に結びつけて考えることはいささか早計であろうが、そのポテンシ

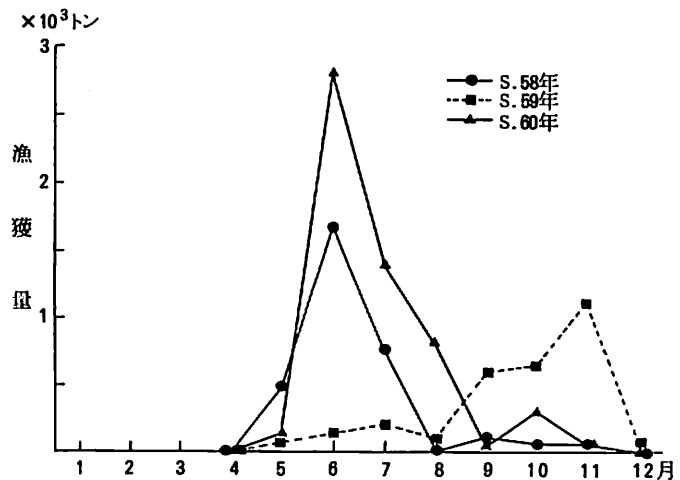


図12 浜田港におけるマアジ漁獲量の季節変化

ャルがあるともいわれており、今後の動向が注目される。

② マサバ

図13にマサバ漁獲量の季節変化を示す。

マサバの近年の漁獲パターンは4～6月の産卵群の漁獲、11～12月の越冬群の漁獲である。昭和58年と60年についてはほぼ同じパターンであるが、春漁、秋漁とも全般的に漁獲水準が低く、昭和59年にあっては春漁の不振に加え、秋の

越冬群の漁獲がほとんどみられなかった。昭和54年には約22,000トン进行漁獲し、資源回復の徴候かとも思われたが、それ以降6,000～7,000トンの水準を低迷している。これは主として春漁の産卵群の漁獲減が原因していると思われ、マサバの資源水準の低さを示すものであろう。

③ マイワシ

図14にマイワシ漁獲量の季節変化を示す。

マイワシの漁獲パターンは12～4月の大羽イワシ（2～4月に産卵群）、5～6月の中羽イワシ、7～11月の小羽イワシに分けることができる。昭和57年頃までは5～6月の中羽イワシが多かったが、昭和59年以降は特に1～3月の漁獲増が目立った。5～6月の漁獲水準は、マイワシの漁獲量が増加しはじめた昭和53年以

降大きな変動はみられていないことから、近年のマイワシ漁獲量の増大は1～3月期の越冬、産卵群の漁獲増によるところが大きいといえ、マイワシの資源水準の豊かさを示しているものといえる。

④ ウルメイワシ

図15にウルメイワシ漁獲量の季節変化を示す。

ウルメイワシは例年5～7月に大・中羽ウルメイワシが

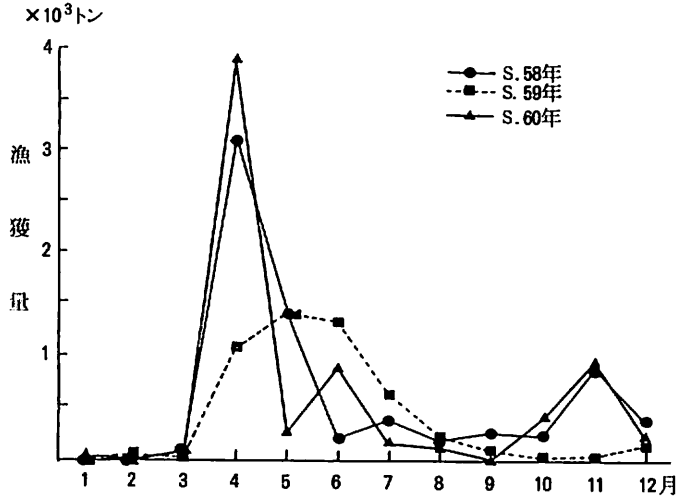


図13 浜田港におけるマサバ漁獲量の季節変化

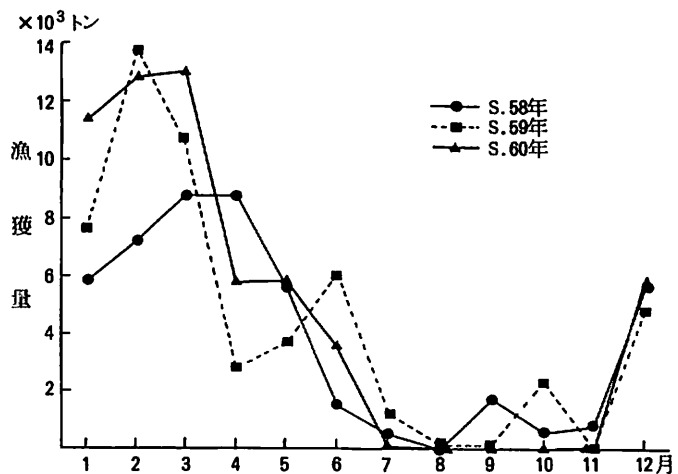


図14 浜田港におけるマイワシ漁獲量の季節変化

9～11月に小羽ウルメイワシが漁獲される。しかし、昭和58年は7月まで漁獲がみられず、8月に入って大羽ウルメイワシが漁獲された。その後、盆休みをはさんで小羽ウルメイワシに戻ったのは例年通りであるが、11月まで比較的安定した漁獲がみられ、秋漁としてウルメイワシの多かったことが特徴としてあげられる。

昭和59年も8月に入っても大羽ウルメイワシの漁獲が

つき、8月としては2年続いての好漁であった。ウルメイワシの資源水準は他の浮魚に比較して低く、安定しているといわれており、例年、月間の変動は大きい、年間の変動は小さい。しかしながら、昭和60年についてはその年間漁獲量は過去10ヶ年間の平均漁獲量の1/5程度と大きく変動し、逆に、月間の変動は比較的小さかったのが特徴的であった。

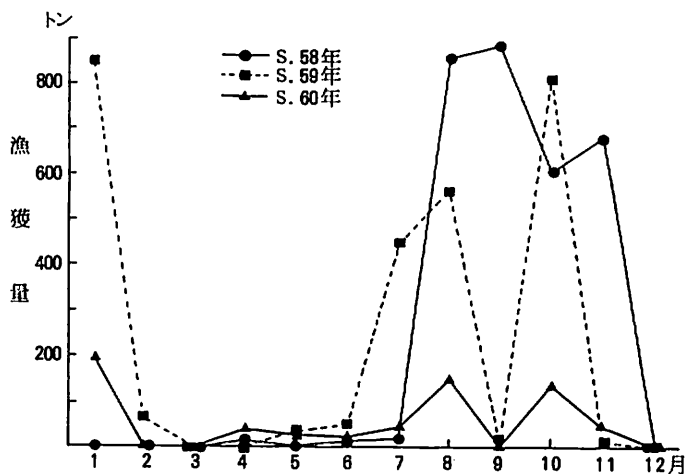


図15 浜田港におけるウルメイワシ漁獲量の季節変化